

## 《随筆》

## ゴルフ残酷抄

大阪大学工学部溶接工学科教授

大西 巖

「ゴルフは日本に適していない」ゴルフ不可論を唱える先生にその理由をうかがうと、「地図を見てごらん、日本は海の中の細長い国だ。どこからボールを打つても海へとび込むじやないか」なるほどうまい表現だが、ゴルフのはじまった国は長さも持たない島国だというから日本は長さがあるだけ、ましかも知れない。

テレビは戦後の流行であるが、戦前からあったもので戦後に熱病的流行をしているものとしては、ゴルフを挙げてもはずかしくない。たとえば球撞きの成長率とくらべると雲泥の差がある。山といわず、河といわず、ゴルフ場は雨後の筍のごとく開かれて行く。練習場はビルの屋上まで進出し、用具や専門図書は店頭を飾り、猫や杓子までもクラブをひっさげて巷に氾濫する。終戦直後には「立てばパチンコ、坐れば麻雀、歩く姿は焼酎足」とかいわれたのが、今では「立てばゴルフ、坐れば小歌、走る姿は新型車」といわれるから国民経済の成長とも無関係ではない。そしてゴルフは大衆化とともに質の低下もあり、エチケットを重視するスポーツとはおよそ縁遠いスポーツとして生れ変わって行く可能性が多い。もちろん人間どもの問題であり、ゴルフ自身はなんにも知らないことである。

いつだったか、同窓誌上でゴルフはスポーツなりやの問題で論争があった。論争のポイントは確か、ハンディにあったと記憶している。つまり、ハンディをつける以上はスポーツでなく、遊びであるということになる。詳しい内容は忘れたが、今ではゴルフはギャンブルなりや否やで論争した方がもっと現実的ではなからうか。この道の純粋な愛好者には申し訳のない暴言ともとれるが、ゴルフを終って食堂で現金を平気でやりとりする人々の姿を見ると、ついいてみたくもなる。しかし人によっては達観した意見もある。つまり、ギャンブルの素質あればこそ、大衆とともに生命長く栄えるのだと、碁、将棋の類はもとより、パチンコ、球撞き、ゴルフなども素質があり、これから流行のきざしを見せるポーリングもこの素質があるが故に安心してその事業に投資できるというのである。

ゴルフ・スポーツ論議の時、私はふとハンディでなく

キャディをつけるが故にスポーツから遠ざかるのではないかと考えた。暑さ寒さに重いバッグをさげてプレーヤーに従い、ボールの行くえを見失うまいと目を皿にし、アウトしたボールをちまなこで探し廻わるキャディの姿は主人にしたがう忠犬そのものである。遊ぶ人と働く人が主従に似た関係で余りにも身近かに接近しすぎているため、スポーツとは縁遠い雰囲気が醸し出されるのかも知れない。

カンカン照りの真夏のこと、あるコースで50才近い婦人のキャディについてもらったことがある。汗が出ても喘いでも私は結構楽しいが、キャディさんはさぞつらからうと思えたので、

「私は遊んでいるのだから面白いが、あんた方は仕事とはいえ、こんな日にはつらからう」

となぐさめると、彼女は頬かむりの中の陽やけした顔を綻ろばせて、

「実は、いやいやながらです。しかしつらい顔はできません」

と正直な返事である。あとでこのコースへ連れてきて頂いた友人に、

「あのととしてはキャディはえらからう。一緒に廻っていると、気の毒に思えて仕方がないよ」

と洩らすと、友人は、

「馬鹿をいえ。あの人は2〜3千万円の預金を持っている。もちろん値上りの土地を売ったかねだがね。利子だけでも充分生活できるが、遊んでいてもつまらぬので、気がねのない仕事でこづかいを稼いでいるんだよ。同情されるのは君の方だ」

ときかされ、ガックリときたことがある。



私がゴルフをはじめてからもう6〜7年にもなる。その頃の私にはまだ元気が残っていた。ゴルフの自慢話に子供のように夢中になっている連中をみると、「おれはゴルフよりほかにも楽しいことがまだ沢山できるのに、あいつらはゴルフのほかにはもう何の楽しみもなさそうだ」と他愛ない彼らに憐愍の情を抱いたことがある。一つはその報いもあってか、ゴルフは何年経っても一向に上達しない。私の所属するクラブのハンディ掲示板を見ると36のどん尻族中、私は最古参であり、同類と思っていた者の名前は何時の間にか私をけとばして上の方へあがっている。しかし新入りが次々とあるのだから、何年経っても同族の減る心配はない。ゴルフ場へ顔をみせるのは大体、ひと月に1回ぐらいの割合だから、クラブの従業員やキャディさんは蔭で「月一のおつさん」と呼んでいるらしい。知らぬ人がきけば高利貸しと間違えられそうな嫌なニックネームだが致し方がない。

ゴルフの醍醐味はグリーンの上の遠距りから精密、巧妙なねらいで、ホールを一発で決めることにもあるが、何といっても白いボールが青空をきってアッというまに点のように遙かな彼方に消えて行くことにあろう。私が強振すると忽ちクラブは宇宙をきりあるいは地球を掘る。稀にボールに命中するとボールはラフ（荒ら芝）の中を蛇が逃げる如くに、ガサガサと音をたてて陰気に姿を消す。私の場合のようにザル碁、飛車とり将棋、チョンボ麻雀、土掘りゴルフ、オンチは歌だけでなく、飛ぶ球までが方向オンチと、何れも一貫性のあるところを見ると練習量の不足だけで片付けられる問題とは思えない。

ものぐさな私でも、たまには打ちばなしの練習場へ足を向けることがある。どこの練習場も空席のあることは稀だが、有難いことに知人が先に打っている時には、

「先生、こちらどうぞ」

と、若い人から打席をゆずられることがある。私が打と身構えるころには私の周囲は人ばかりである。練習場の見知らぬ人々が私の打つを見ようとしているらしい。先程の「先生」が効いて、彼らは私をゴルフの先生と間違えているようだ。ここで打つのはまことに幸い思いであるが、これも致し方なかろう。



何の目的でゴルフをやっているのかとまじめにきかれると、「歩くために」と答えるしかない。事実、上手な人よりも歩く距りは多い筈である。物臭い私が時々これだけの距りを歩くのは、全くゴルフのお蔭と思っている。だからボールを失うような難所では無理せずに球をポケットに納めて歩けばよく、何なら一度谷底を廻ってきてよい。打数を読むことには仕事臭い煩雑さがあり切角の解放気分を損じる。コンペティションでなければ打数など気にする必要は毛頭ない。

こんなゴルファー？でも稀には仲間同士のコンペに顔出すことがある。私の先輩や友人、知己にはコンペに限って私を引っぱり出したがる奴が多い。何時もにが虫を潰したような顔のぼくねん居士でも、スタートで私と顔が会いと珍らしくニヤッと笑ってくれる。全く気持ちの悪いことである。よく考えてみると私が出場している日にはブービー賞（どん尻から2番目の賞）にありつく確率が多いと心ひそかに喜んでいるのらしい。

コンペにはやりとりのほかに、賞品までがついているので余計に打数にこだわるのであろうが、こせこせとして不愉快なことが多い。日頃仲のよい同士の競枝、つまりプライベートのコンペではルールやエチケットがボールよりも遠くへとび去ってしまっていることがある。ホール寸前でOKしてもよい場合にはOKの数は計算に入れずに「OKだから入ったのと同じと違うのか」と頑張

る勝手爺さん。コースから下へ落ちたボールは打ち上げずに手でほうりあげ、「人に言うな」とキャディに念を押しカニング爺さん。山すそをスライスして自分の足もとへ転んできたあと組のボールを「怪しからん奴だ」と靴で土中へ押し込めておく意地悪爺さん。セカンド・ショットで規定距り内でのボールの移動が許されているとき、あたりに土や砂があると指先でつまみあげ、その上にボールをのせて打つおつまみ爺さん。百鬼夜行油断もすぎもあつたものではない。

今打つか、今度こそ打つかと見守っているのに一向平気で10数回も素振りをやって他人のペースを狂わす作戦爺さん。私は一度このスタミナ居士と同じ組になったことがある。念のため数えていると13回も素振りをしやっと14回目に打ったのが何とチヨロであったことを憶えている。私は心中甚だ愉快だったので、つい喜びのあまり、

「あんたは家でも素振りばかり入念で、いざ本番というときにチヨロをやっているのと違うのか。一度奥さんにきいてみたいものだ」

とひやかすと、余り怒った表情を見せない彼が憤然として色をなした。

「何をぬかさうと腹をたてんが、そのことだけは別だぞ。ほんとのことをズバリ言い当てられたときは身を切られるようで我慢がならん」

自分で白状しているのだから、実のところ大した作戦家でもなさそうである。



はなはだ尾籠な話で恐縮だが、ゴルフ中に下痢便を催したことが2回ある。1回は余り暑いので途中の休憩所で冷えた牛乳を飲んだ折で、その数分後には下腹部が痛みはじめ、今にも洩れそうになるのをこらえていると真夏というのに額に冷や汗が滲み出る。そのときの仲間である年若い人達に打ち明けると、

「年寄りと一緒に来ると、これやから困る」

ほんとに困っているのはこちらであるのに、一向に同情してくれない。幸いクラブハウスが意外に近いところだったので、道具を捨てて一目散に駆けだした。

1回はお昼の食事のあと、疲労回復のつもりで、平生のみ憤れない超高単位のビタミン錠を服用した午後のコースのことである。それまで機嫌よくプレーしていたのに突然腹痛を感じた。痛みは間歇的ではあるが、その度毎に腸内の充填物質の圧力エネルギーは今にも速度のエネルギーに転換されてノズルの出口からとび出しそうである。この周期は次第に短くなって追ってくる。クラブハウスや休憩所は遙かに遠い。私は恥をしのんで若い娘さんのキャディに、

「ここに大便するところはないか」

と問うと、

「ハウスまで行かねば」

と素知らぬ顔である。

「そんなのんきなことをいっている場合ではない。いまこの近くで済みたいのだ」

「困りますね。木立ちや草むらへボールがとび込むとキャディが探しに入るのでから、迷惑しますよ」

私が困り果てていると、もう一人の娘さんが、

「左側の丘でしたら、ボールのとび込む筈がありませんから、あそこへ入られては」

と助け舟を出してくれた。仲間達は先へ進むし、私はガサゴソと脇道へ踏み込む。若い女の声で「おげれつね」といったのが耳底に残って消えない。

木の枝で落ち葉を払い、上土を掘ると何の抵抗もなく湿気を含んだ上肌が頭われ、たちまち手頃の孔ができた。立木に囲まれた中で用を達してホッとしながら落ち葉を集めて充分に孔を覆った。その埋葬の念の入れ方は「おげれつね」へのレジスタンスのようでもある。グリンの外から一打で苦もなくホールインしたとき「ノンズロ」と呼んでも彼女達は「おげれつ」とはいわず、さも当然そうな顔をしている。私がやむにやまれぬ生理現象を遠慮勝ちに処置しようとするのが「おげれつ」だろうか。

茂みの中からボンととび降りると、丁度次の組の見知らぬ連中が歩いてくるまん前であった。女の子は「ヒヤーツ」と大声をたて、男達は「猪かと思った」と吐ぶ。不思議そうな彼らの視線が私に集っている。



友を選ばば書を読み六分の俠気、四分の熱と与謝野鉄寛はいみじくも詠んだが、不幸私の友には俠気のかけらもあろうとは思えない。私のゴルフが筈にも棒にもかからぬしる物であることが尾簾をつけて女房に伝えられているのは彼らに俠気のない証拠である。実は女房に知られてもっと都合の悪いことはほかにもある筈だが、それだけは、未だに彼らの胸三寸に納まっている。それも「限界線に対する友情の発露」などと偉そうに威張れた

ものではない。彼我共に原爆所有者であるがためのパランス平和に過ぎない。しかし、いずれにしても悪友の告げ口がなくてもゴルフ競技で、あとにも先にも1回だけ入賞の榮に浴したのがブービー賞とあっては、落ち着く先は同じことだろう。

先日、女房が近所の奥さんから、

「宅の主人ときたら何をさしても上達しません、お宅のご主人はずっと前からゴルフをやっておられるようですから、さぞかしお上手なんでしょう」

といわれ、いくら弁解しても謙遜と思われて、

「あほらしいやら、つらいやら」

ときた。私は胸を張って

「縁なき衆生に何の弁解が要ろう。おかげで近頃は、80を切っていますとか、漸くシングルになりましたとかいっておけ」

「そんな大ぼらがいえるものですか」

「はらであるものか、コンペではハーフで80を切っているのも事実だし、ワンホールをシングルで叩いているのも事実だから、何の遠慮があるものか」

ゴルフは幾つもの残酷物語りを生む。それにもかかわらず、万年ハボの私でもゴルフは楽しい。それがスポーツであろうとなかろうと、またギャンブルであろうとなかろうと、私には何の関係もない。高単位のビタミン剤と牛乳だけに気をつけておればよい。

「ガサガサという蛇ゴルフでもか」

ときく奴があったら、こう答えよう。

「雑念を去って歩く喜びは理性的なものであるが、ゴルフの真の醍醐味は、風呂にゆっくりつかって、思い切り手足を伸ばすこと、げこの飲む一杯のビールの味、たらふく食べること、そして前後不覚に寝入ることにあり」と。



好きなことを書くとつい枚数が重なる。好きなおしべりにはつい熱が入って話が長くなる。ゴルフに興味のない人の混っているグループで、ゴルフ談義に花を咲かせることは犯し易いあやまちであり、憤むべきことである。ハッと気がついたのでこの辺で筆を擱こう。